

Title	集団実施のバウムテストにみる学生気質：第1報
Sub Title	A quantitative analysis of baum test in the Kyoritsu College of Pharmacy
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko) 大丸, 三恵(Daimaru, Mie) 大森, 郁子(Omori, Ikuko) 早川, 千恵子(Hayakawa, Chieko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1986
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.31 (1986.) ,p.17- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000031-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

集団実施のバウムテストにみる学生気質

—第1報—

小川芳子, 大丸三恵*, 大森郁子*, 早川千恵子**

A Quantitative Analysis of Baum Test in the Kyoritsu College of Pharmacy

Yoshiko OGAWA, Mie DAIMARU, Ikuko OOMORI, Chieko HAYAKAWA

(Received September 30, 1986)

In the Counseling Room of the Kyoritsu College of Pharmacy we have carried out "Baum Test" to the new students every year.

About 2000 sheets of "tree pictures" have been accumulated for 9 years from 1978 to 1986.

We analyzed the sheets according to the method that had been adopted in the Kyoto University.

The students of the College are generally good at unifying their ideas without going astray. But it is noticeable that they are not good at expressing themselves emotionally freely.

Though we examined whether or not there was any change in the result of longer period, we got on the same result as before. We have concluded that the fact is one of the uniquenesses and credibilities in "Baum Test".

On the other hand, we noticed the wider space concept. It is because the students are accustomed to the test and the "Visualized" environments as in television and video games recently.

はじめに：

共立薬科大学の学生相談室では、新入生に毎年 YG テストとバウムテストを実施している。YG テストはコンピューターで性格診断されたものを本人に返却する。学生相談室の存在を知らせるために返却場所として相談室を指定している。毎年95%以上が記入し、記入した者は殆んど全員が取りに来る。

質問紙法による性格テストとして YG テストを、投影法のテストで比較的短時間に集団実施可能なものとしてバウムテストを用いた。

このように昭和53年から実施しだして、61年まで9学年分のバウムを前にした時、時間軸にそった量的分析をすることで、本学々生の傾向、学生気質がわかるのではないかと思われた。

* 文京区教育センター

** 東京女子大学学生相談室

京都大学で10年前に同じような試みがなされていたため、整理方法は京大法¹⁾に準拠した。

9学年中6学年分の整理が出来たのでここに報告する。今後さらに全学年分の整理をすると同時に、分析方法をYG性格テストとの関連を含めて再検討、臨床例にどのように生かしていけるかを考え続けていく。

1. Baum test とは

木を描かせてその絵がその人のひととなりを表現するとの発想は Emil Jucker と云われるが、筆跡学になぞらえ60余の指標特徴をあげ「バウムテスト—精神診断学的補助手段としての樹木テスト」として、1952年世に発表したのは、スイスの Charles Koch である。我が国へは1969年英訳版の訳本として紹介された。

木を描くことは、私達が心の中に持つイメージの樹を、筆をとおして表現することである。この場合表現された樹はその人自身に他ならないのである。そこで心理テストとして投影法の1つに分類されている。

バウムテスト実施にあたっては、A4版(210×297 mm)画用紙1枚と中程度の柔らかさの鉛筆と消ゴムが被検者に渡され、「実のなる木を1本描きなさい」という指示によって自由に木を描かせるだけである。

描かれた木を見て、テストとしての解釈判定をするわけであるが、このテストから3つの側面的観察が出来る。しかし精神学的補助手段としてバウムテストを使用する場合は、3つを統合して直観的判断が可能である。

3側面とは、描かれた樹木のかたちを分析する形態分析から発達の側面の分析が出来る。次に鉛筆の動きを観察することで動的分析をし、性格テストの側面の分析が可能である。3番目に空間象徴の解釈をすることで、その人物の生活空間における自らの位置づけ、および対人関係の場におけるその人物のあり方を推測することが可能である。

表現されたものは外見そのものではなく、樹木の外へ向う動きによっては、内部から溢れる心の動きが読まれるなど心の投影といえる。一般的には木の葉や幹の表面など、外界と直接接触のある部分は自我の現われを、枝や幹は自我の構造を、根などは大地即ち無意識とのつながり安定感などと関連づけて解釈されるのである。

解釈の仕方は、同じ形態であってもかなり違った意味も含まれ、幅が非常に広がっている。樹木画それだけを盲目的に分析の対象とすることは、コッホも固く戒めている。樹木画はむしろ、その人間の存在様式をある程度知ったうえで解釈の補いにされるべきテストである。

2. 実施方法

本学は薬学部だけの単科大学で、1学年は200人程度である。小規模の女子大学であるところから、面倒を見過ぎるのではないかと云われる面があるほど、木目細い教育を主眼としている。

入学式後1週間ほどの間に身体検査が行なわれるが、その折を利用して性格テストも実施する。

年によって時間的配置、同時に他の調査を行うなど多少スケジュールに変更はあるが、200人を同じ教室に集め学生相談室のカウンセラーとして自己紹介後、YG性格テストとバウムテストの記入をすることは変らない。

YG テストはコンピューターが採点したものを返却する旨伝える。

バウムテストに対しては「実のなる木を1本描いて下さい」という指示を与えると、「エー」とか「絵なんかかけない」といった声が聞えてくるので「絵の上手下手で採点するテストではないので、思いついたまま描くことを楽しんで下さい」といった注釈をつけることが多い。

時間は特に規定しないが1時間位で殆んどが書き終える。

3. 整理方法

バウムテストの判定規準は、明確に確立されているわけではない。課題の知的処理と投影的所

Table 1 バウムテスト整理リスト

<p>A 基本的なもの</p> <p>(1) 実, どこにあれ実らしきものを含む</p> <p>(2) 葉, 一枚一枚かかっているもの, 少なくともそれらしきもの</p> <p>(3) 花</p> <p>(4) 枝</p> <p>(5) 根, 幹基の拡がっただけのものは含まない</p> <p>(6) 地平線, 幹基の広がりとは区別しうるもの</p> <p>(7) 背景, 抽象的なものを含む, 木に鳥がいても風景とする</p> <p>(8) 文字の書込み, 図案化されたものを含む (立札 etc.)</p> <p>(9) 線描樹冠, 形はなんであれ, 一本線で囲まれた冠部</p> <p>(10) 冠中果, 樹冠内で浮いている実</p> <p>(11) 落ちる実や葉, 落ちているものを含める</p> <p>(12) 裸木, 葉, 実, 線描樹冠等のないもの。幹と枝だけのもの</p> <p>(13) 周辺佇立, 幹が紙端より始まる木</p> <p>(14) 戯画的表現</p> <p>(15) 実の強調, 数が多すぎる, 比率から見て大きい, 強い線で書いてある。黒く塗ってある</p> <p>(16) 用紙からはみ出し</p> <p>(17) 立体感の表現されているもの</p> <p>B 幹に関するもの</p> <p>(18) 二本以上, 同じ位のが二本以上。小さなものが別に描いてある時は背景に含める</p> <p>(19) 斜幹, 傾いている幹 (方向も記録)</p> <p>(20) 曲幹, 曲がった幹 (方向も記録)</p> <p>(21) 幹の模様, 陰影を含める</p> <p>(22) 幹の傷又は枝の切り跡</p> <p>(23) 電柱的幹, 太さに変化のない幹</p> <p>C 枝に関するもの</p>	<p>(24) 三次元枝, 前方につき出た枝</p> <p>(25) 一線枝, 一本線で描かれた枝, 幹から出る枝で見る</p> <p>(26) たれ下った枝で下向きの枝</p> <p>D 樹型に関するもの</p> <p>(27) 基本型 Basic type</p> <p>(28) 冠型 Crown type</p> <p>(29) 放射型 Radial type</p> <p>(30) ヤシ型 Palm type</p> <p>(31) エダのみ Branches</p> <p>(32) その他 Abstract etc.</p> <p>E 幹端に関するもの</p> <p>(33) 開放</p> <p>(34) 鋭閉</p> <p>(35) ツキシケ</p> <p>(36) 放射</p> <p>(37) 直閉</p> <p>(38) ものかげ</p> <p>(39) その他 (幹のないもの etc)</p> <p>F 位置に関するもの (幹の中心の位置)</p> <p>(40) a)</p> <p>(41) b)</p> <p>(42) d)</p> <p>(43) e) } Hの位置区分による。</p> <p>(44) f)</p> <p>(45) g)</p> <p>(46) h)</p> <p>G 葉に関するもの</p> <p>(47) 葉のみが描かれている</p> <p>(48) 線描樹冠のみかかっている</p> <p>(49) 葉も線描樹冠もかかっている</p> <p>(50) 葉も線描樹冠もかかれていない</p> <p>H 大きさに関するもの (a~iに9分割する)</p>
--	---

Table 2 整理リストによるプラス判定数

		S 53年 N=178	S 54年 N=199	S 57年 N=217	S 59年 N=227	S 60年 N=171	S 61年 N=217
A 基 本 形	1	110	174	199	211	143	203
	2	58	106	97	106	69	95
	3	5	6	4	4	3	2
	4	138	158	162	173	129	164
	5	77	92	98	99	63	89
	6	40	55	79	99	81	99
	7	20	27	56	40	23	45
	8	4	17	22	24	11	18
	9	124	100	154	137	111	135
	10	57	74	109	97	71	106
	11	6	9	30	26	10	16
	12	1	0	0	0	2	0
	13	1	0	4	0	0	2
	14	1	5	2	12	2	2
	15	14	39	18	25	15	30
	16	16	41	15	47	33	42
	17	21	55	14	14	90	24
B 幹	18	3	4	1	9	2	2
	19	1	5	5	7	1	2
	20	2	4	0	6	2	1
	21	68	87	91	108	93	106
	22	15	28	20	31	6	29
23	2	5	6	11	0	2	
C 枝	24	3	4	2	15	4	0
	25	19	14	40	15	6	14
	26	1	10	1	11	6	11
D 樹 型	27	89	79	112	112	81	85
	28	41	29	48	40	47	55
	29	40	67	41	62	46	63
	30	3	3	7	10	5	9
	31	0	7	3	2	0	3
	32	2	14	3	5	2	1
E 幹 端	33	29	25	53	38	30	40
	34	2	5	5	9	2	4
	35	5	11	5	7	6	2
	36	116	116	112	131	109	125
	37	2	0	0	3	0	1
	38	19	20	34	34	26	38
39	3	22	5	4	2	5	

		S 53年 N=178	S 54年 N=199	S 57年 N=217	S 59年 N=227	S 60年 N=171	S 61年 N=217
F 位 置	40	0	1	0	0	0	0
	41	7	7	10	17	9	16
	42	5	4	4	4	4	4
	43	155	159	186	195	150	180
	44	3	1	2	4	1	0
	45	0	0	0	1	1	0
	46	5	6	7	5	2	9
G 葉	47	31	67	49	64	37	55
	48	105	83	109	103	86	90
	49	21	16	41	37	24	27
	50	18	7	10	17	17	13
H 空 間 利 用	a	156	179	201	217	164	212
	b	168	190	209	225	167	217
	c	148	174	178	210	160	213
	d	165	194	214	221	168	212
	e	176	199	216	227	171	217
	f	153	183	203	210	160	208
	g	101	147	167	177	132	177
	h	153	187	206	217	161	205
	i	85	122	153	147	122	155
	計	7.33	7.91	8.10	8.16	8.22	8.37

計は a-i 9 分割の為 (9 になれば 100% 利用)

産の差異を明白に区別出来ないという投影テスト共通の限界でもあるわけである。

判定方法として何通りか報告されているなかで、健康な学生集団 5 万枚以上からチェックリストを作った京都大学の方法¹⁾を参考にして Table 1 の整理リストに従って分類した。

描かれたものの有無でチェックすることは誰が見ても同じ結果になるが、表現形式を判定する次の項目は見る人によって判定がかなり異ってくる。

14. 戯画的表現

15. 実の強調, 数が多過ぎる, 比率からみて大きい。強い線で描いているかどうか。

17. 立体感の表現

19. 斜幹

20. 曲幹

24. 三次元枝, 前方につき出た枝

26. たれ下った枝で下向きの枝

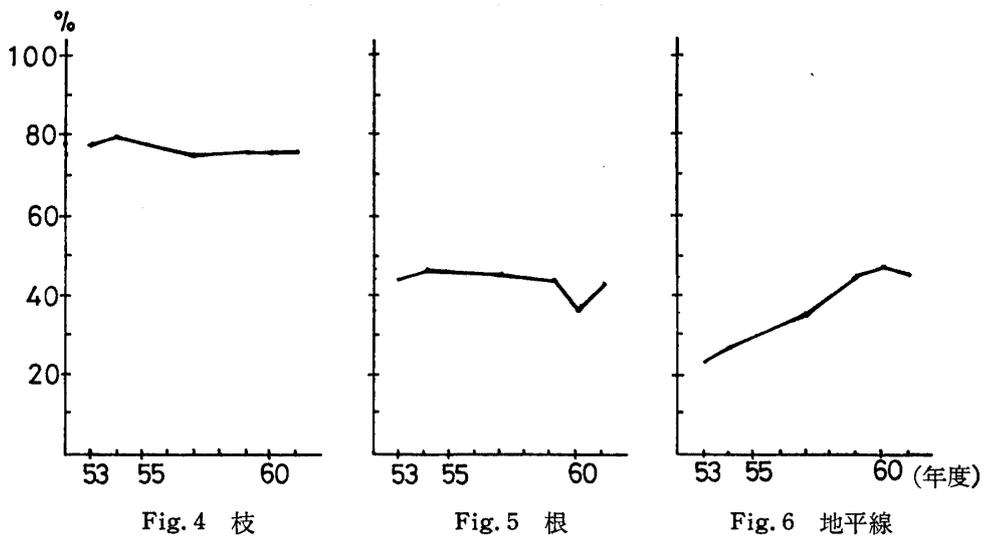
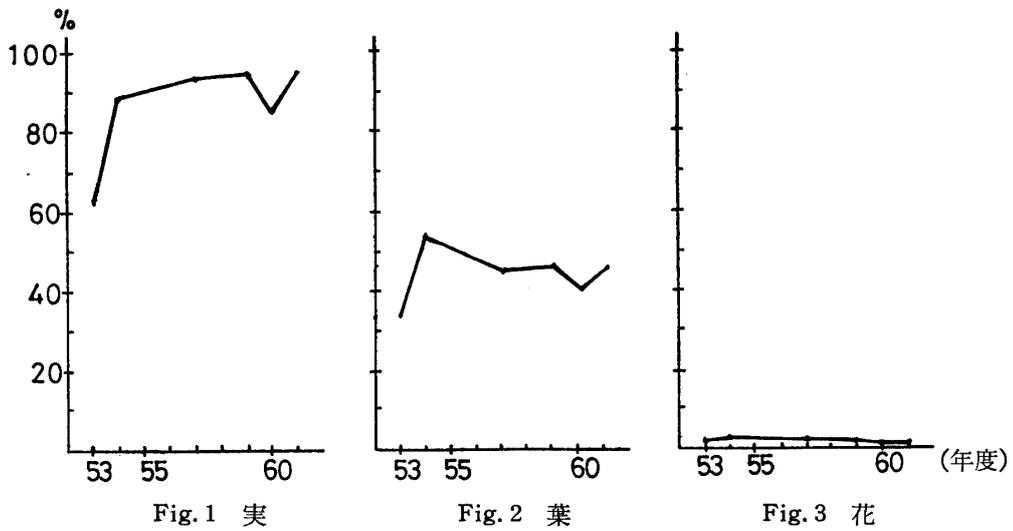
E. (33~39) 幹端に関するもの

偏りを防ぐため 4 人で討議, 出来るだけ共通理解のもとに作業を進めた。

4. 結果

53年から61年までのバウムテスト中6学年分を整理表に従い、Yesと判定したものの数をTable 2 にまとめた。

Table 2 の数字を各項目ごとに、各学年人数中に占める割合になおしグラフ化したのが、Fig No.1~60 である。グラフ化することで学年間の変化が明瞭になる。



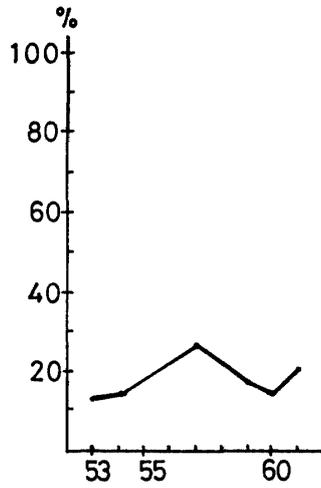


Fig. 7 背景

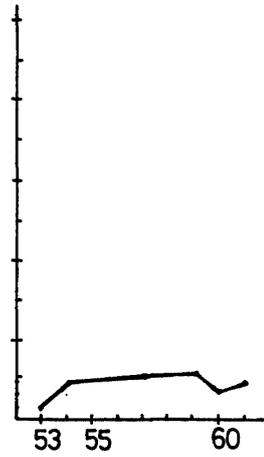


Fig. 8 文字の書込み

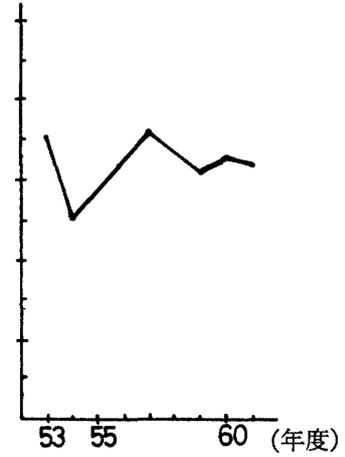


Fig. 9 線描樹冠

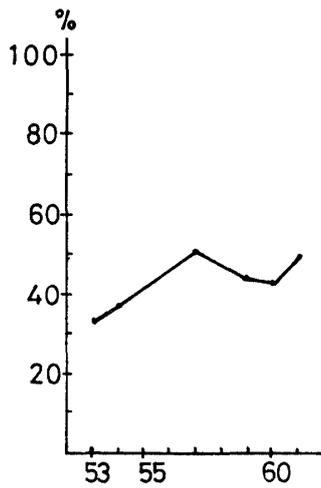


Fig. 10 冠中果

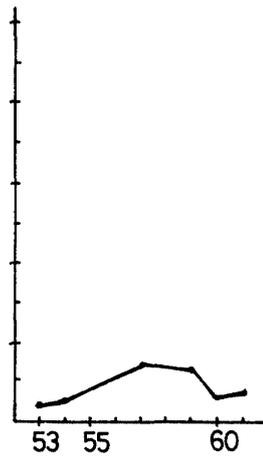


Fig. 11 落ちる実や葉

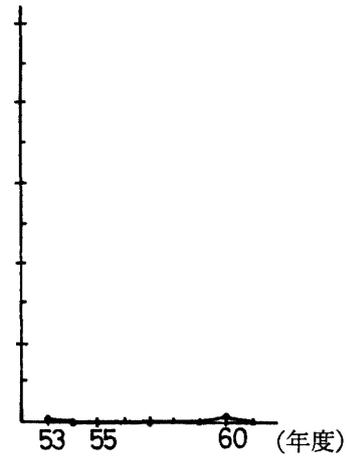


Fig. 12 裸木

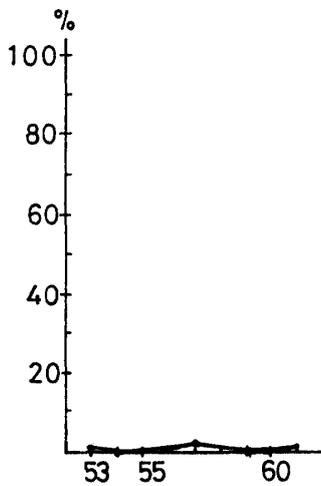


Fig. 13 周辺佇立

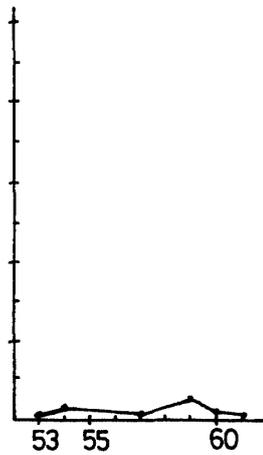


Fig. 14 戯画的表現

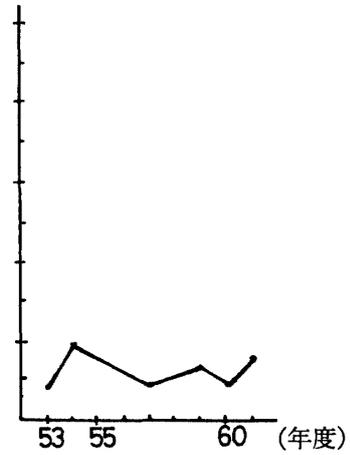


Fig. 15 実の強調

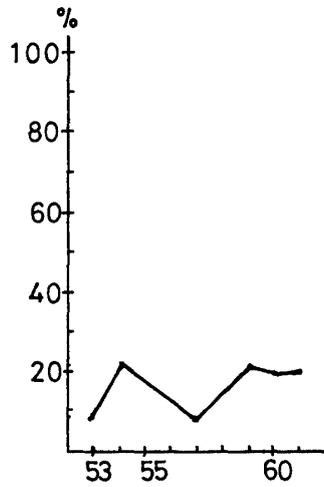


Fig. 16 用紙からのみ出し

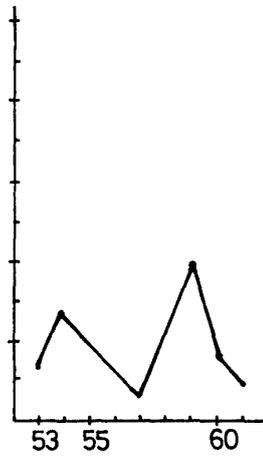


Fig. 17 立体感

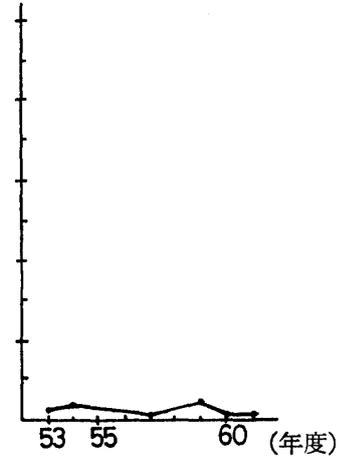


Fig. 18 2本以上

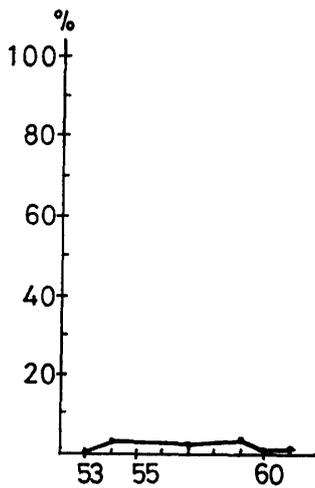


Fig. 19 斜幹

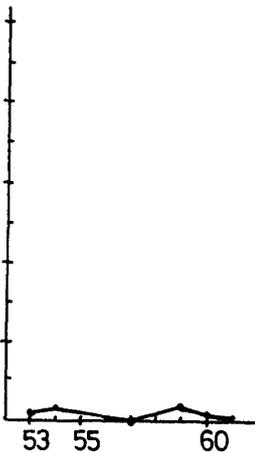


Fig. 20 曲幹

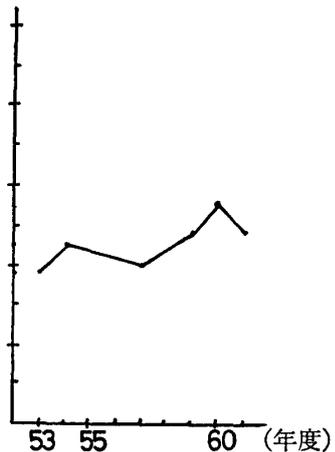


Fig. 21 幹の模様

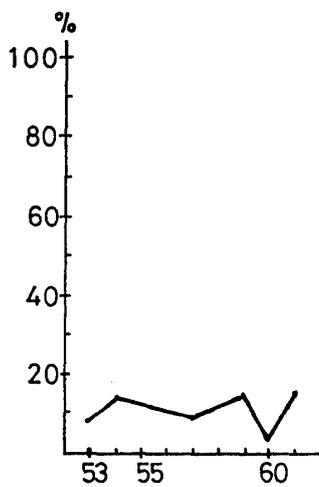


Fig. 22 幹の傷

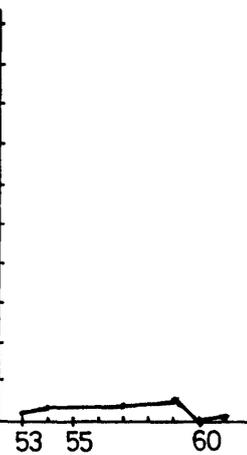


Fig. 23 電柱的幹

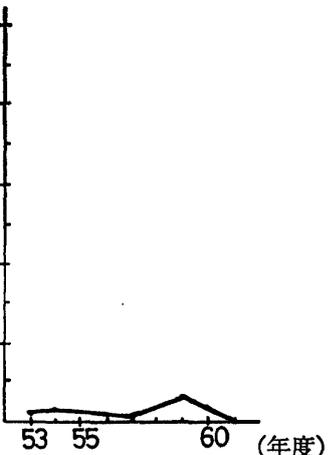


Fig. 24 三次元枝

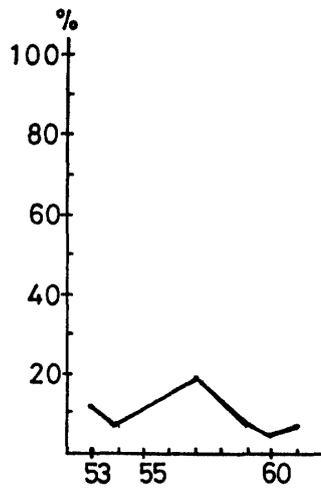


Fig. 25 一線枝

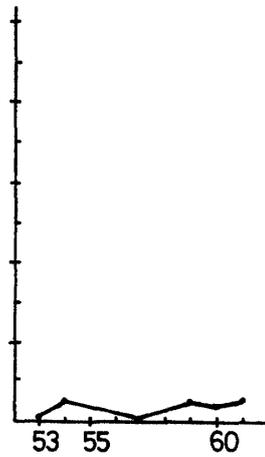


Fig. 26 下向きの枝

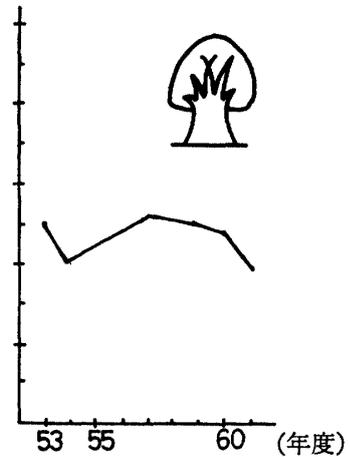


Fig. 27 基本型

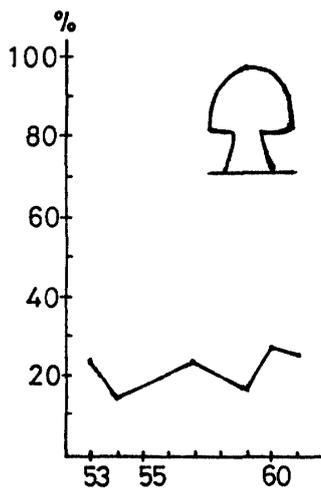


Fig. 28 冠型

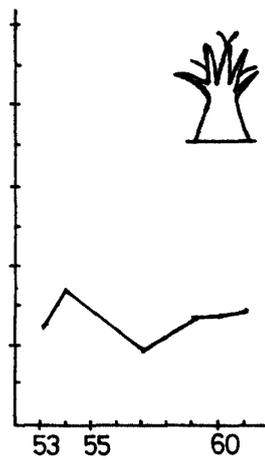


Fig. 29 放散型

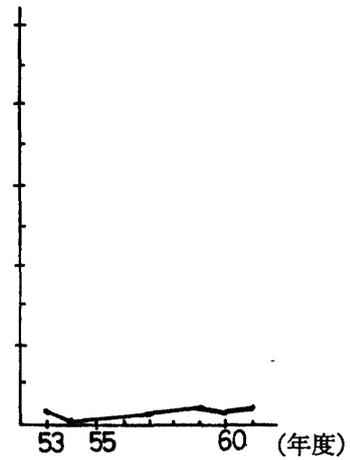


Fig. 30 ヤシ型

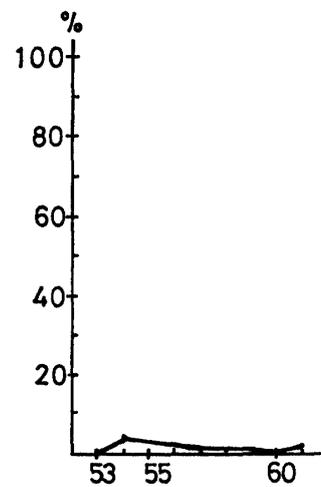


Fig. 31 エダのみ

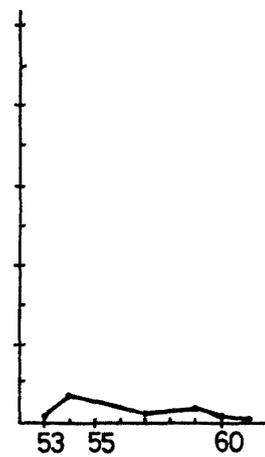


Fig. 23 その他樹型

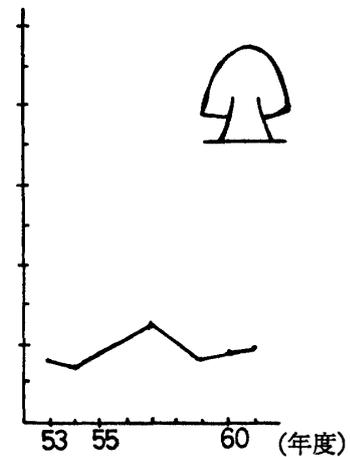


Fig. 33 開放

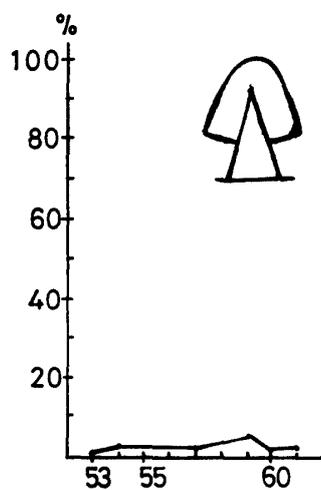


Fig. 34 鋭閉

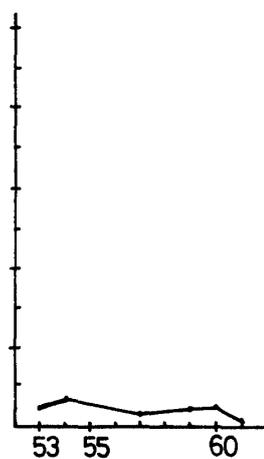


Fig. 35 ツキヌケ

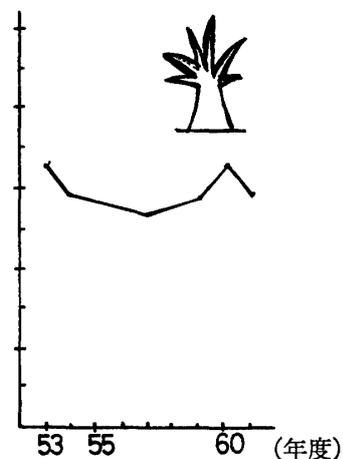


Fig. 36 放散

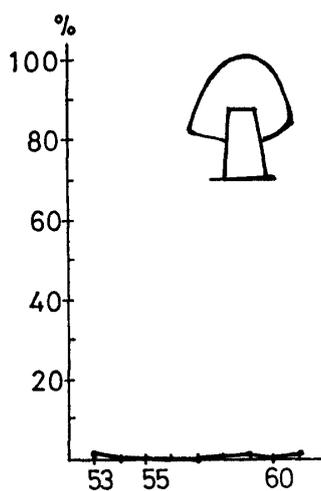


Fig. 37 直閉

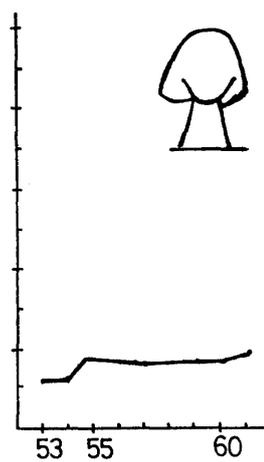


Fig. 38 ものかげ

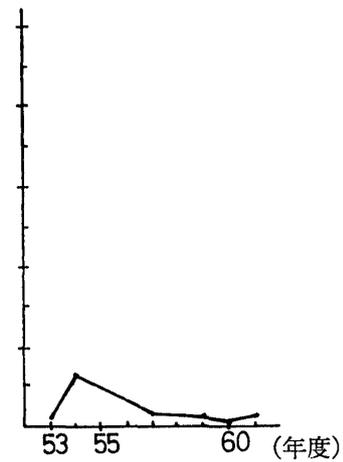


Fig. 39 その他

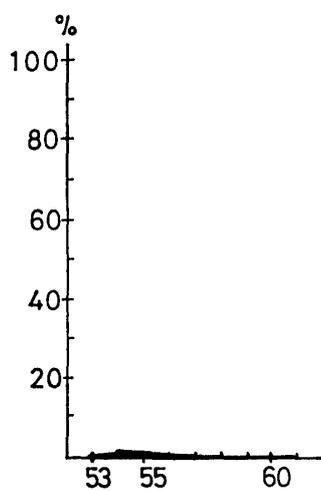


Fig. 40 幹の中心 a

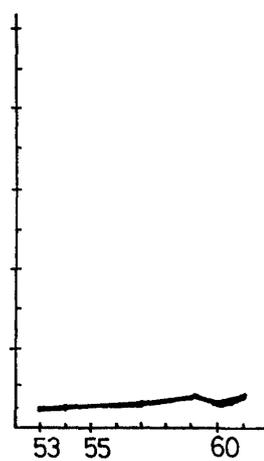


Fig. 41 幹の中心 b

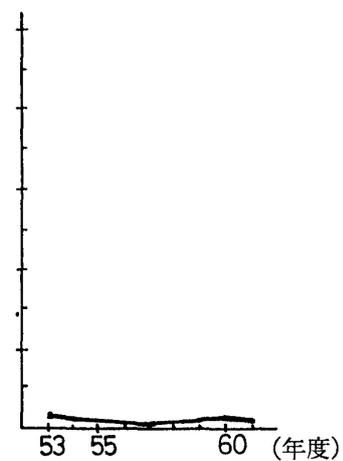


Fig. 42 幹の中心 d

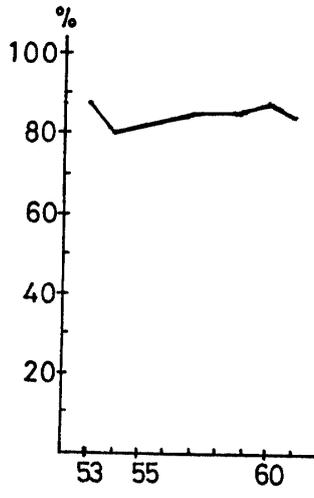


Fig. 43 幹の中心 e

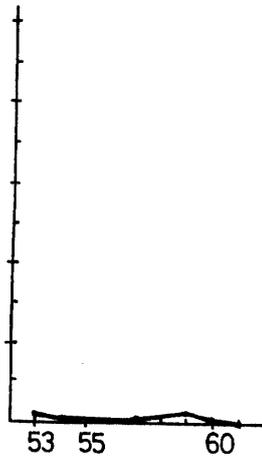


Fig. 44 幹の中心 f

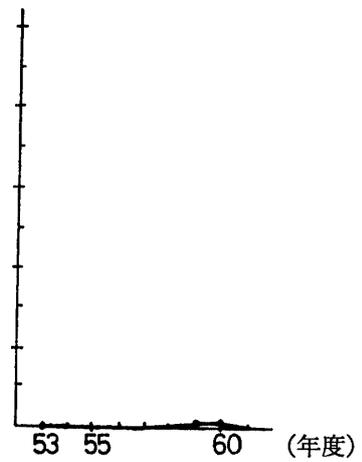


Fig. 45 幹の中心 g

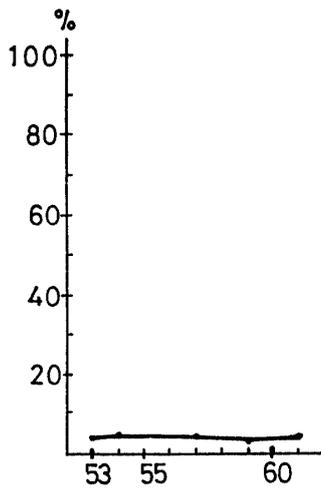


Fig. 46 幹の中心 h

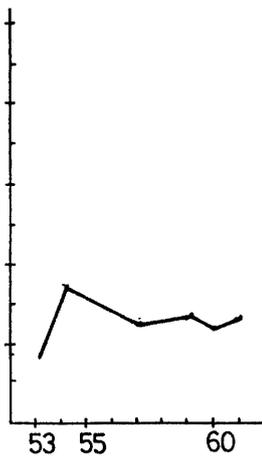


Fig. 47 葉のみ

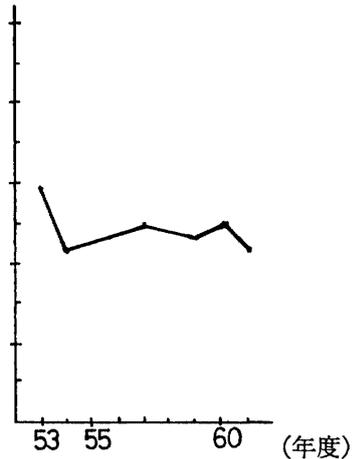


Fig. 48 線描樹冠のみ

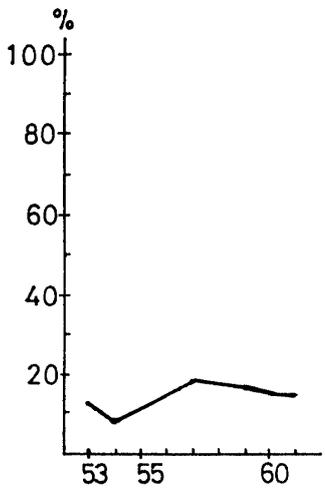


Fig. 49 葉も線描樹冠もある

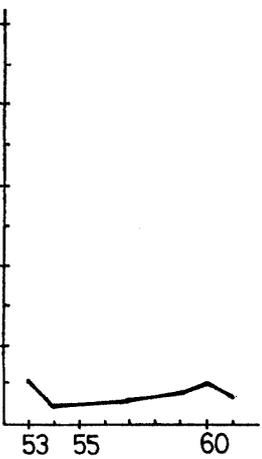


Fig. 50 葉も線描樹冠もない

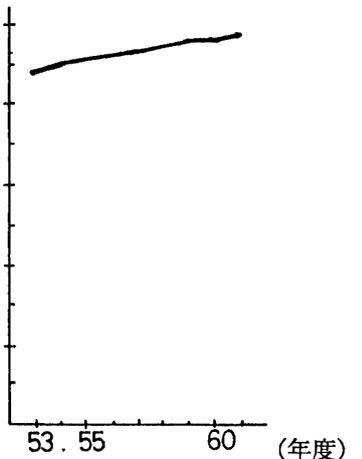


Fig. 51 a

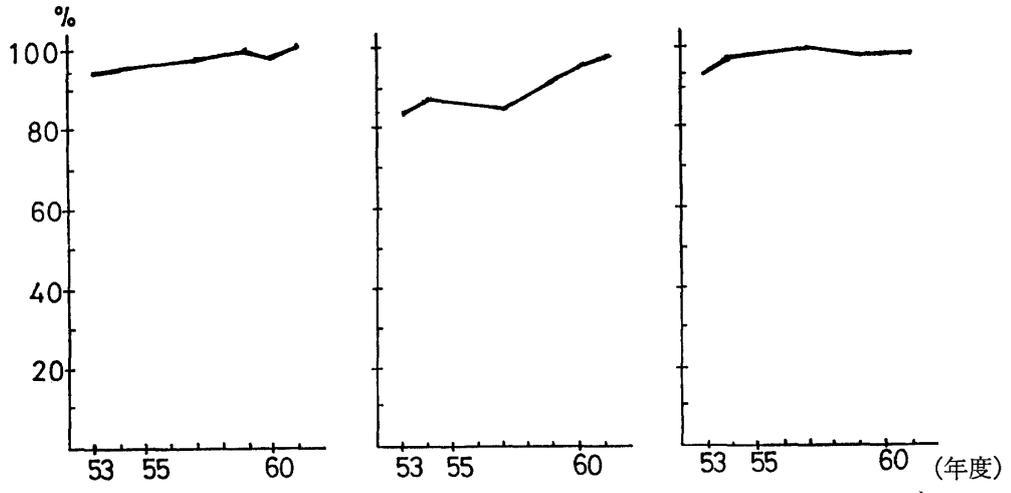


Fig. 52 b

Fig. 53 c

Fig. 54 d

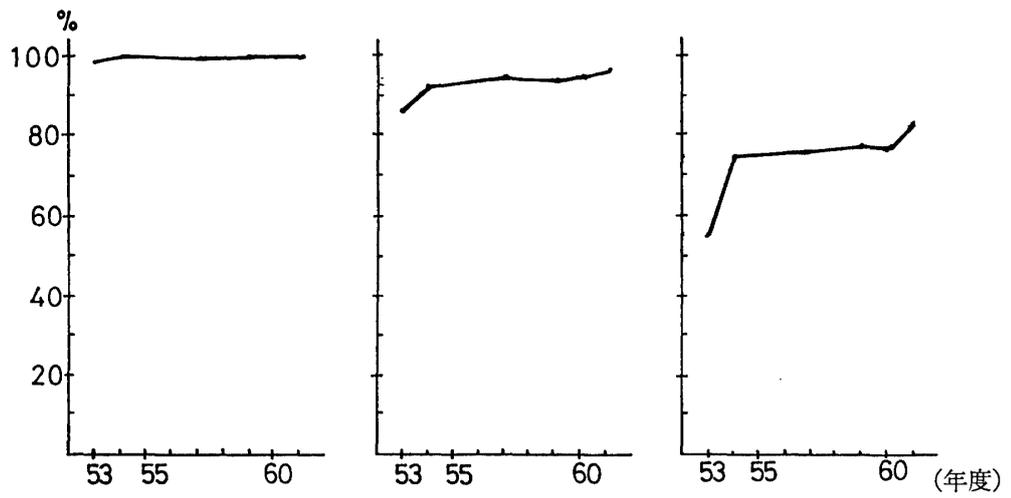


Fig. 55 e

Fig. 56 f

Fig. 57 g

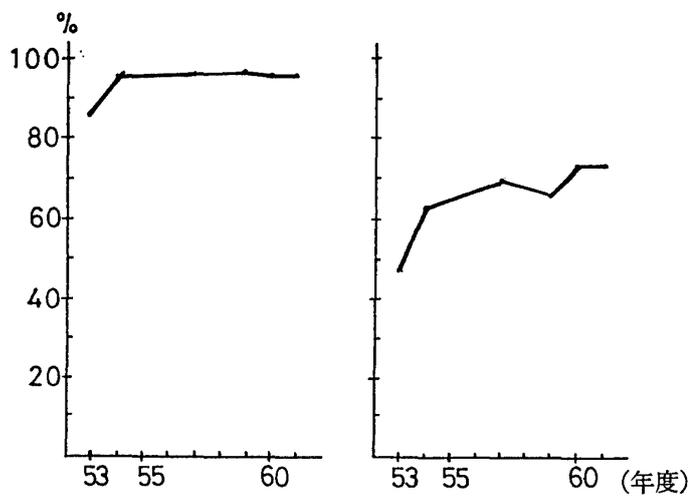


Fig. 58 h

Fig. 59 i

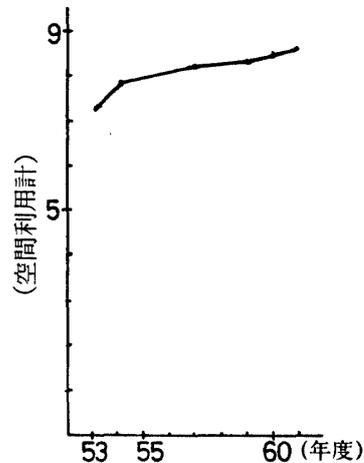


Fig. 60 H計(空間利用計)

a	b	c
d	e	f
g	h	i

Fig. 61 H(分割区分)

グラフ化することで学年間の動向はわかるが、統計処理による有意差があるといえるかどうかを知るため χ^2 検定で検討した。

54年と61年の間に有意差があると認められた項目は次の通りであった。

61年度に多い項目

1*(実), 6*** (地平線), 9*(線描樹冠), 10*(冠中果), 28**(冠型), 38*(ものかげ), a***, b**, i*, H計***

54年度に多い項目

17*** (立体感), 32*** (その他の樹型), 35*(ツキヌケ), 39**(その他の幹端)

54年と61年を検討したのは、53年は実施初年であり指示の仕方に検査者の未熟さからの不統一のきらいがある。54年からは殆んど同形式でテスト実施となっている。よって54年との対比の方が信憑性が高いであろうと検討された。

次に同じ検定法を用いて京大生との比較をした。京大の女子、理学部、看護学部、全体計の4項目につき54年度の結果と検定したのが Table 3 の * 印である。京大結果が51年度のものであるため、なるべく近い学年でかつ前記の理由から54年に決めた。尚大きさ区分は京大法と判定が異なるため、50項目のみにとどめた。

5. 考察

① 京大生との比較にみる特徴

Fig. 1~60 の図から9年間のバウムの傾向は、その年度によって全く違った傾向を示すものはないことがわかる。多少のバラツキがあってもかなり一定した方向性がある。そこで1番時間差のある54年と61年で有意差がどの程度あるかを検定して前述した。この検定値と Table 3 の京大生との比較をみると * 印が京大生との比較の方に多いことがわかる。8年経過しても較差が小さいことは、毎学年間の有意差はもっと小さいことがグラフからわかる。

各数字は Table 1 の項目名をさし χ^2 検定で有意差のあった範囲を * 印で示す。

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

Table 3 京大生と54年度生との比較

		女子 N=100	看護 N=100	理学 N=100	計 N=400			女子 N=100	看護 N=100	理学 N=100	計 N=400	
基	1	88	86	87	352	樹	27	32	43	47	160	
	2	50	51	49	190		28	37**	32***	26*	97**	
	3	5	7	4	13		29	20**	24*	24*	105*	
	4	88	92**	86	347*		30	2	1	2	17	
	5	45	47	50	182		型	31	7	0	1	10
	6	34	38	61***	192***			32	2	0*	0*	11
	7	16	22	20	62			幹	33	15	10	6
本	8	1*	2	8	26	34	13***		12***	17***	40***	
	9	54	63*	51	184	35	1		14*	4	19	
	10	38	39	30	116*	36	40**		33***	40**	176***	
形	11	11*	14**	6	21	端	37		4**	0	2	18**
	12	1	3	1	8		38		25**	31***	30***	97***
	13	3	19***	3	21**		39		2	0**	1*	5***
	14	4	3	10**	32**	位	40	2	0	2	4	
	15	11	23	18	77		41	24***	5	15***	68***	
	16	15	45***	18	83		42	5	1	5	13	
	17	65***	66***	61***	278***		43	67*	90*	76	308	
幹	18	4	5	0	7	置	44	1	4	1	4	
	19	10**	8*	13***	36**		45	0	0	0	0	
	20	10***	13***	21***	61***		46	1	0	1	4	
	21	42	39	45	213*		葉	47	40	29	39	153
22	23	24*	20	80	48	44		41	41	147		
23	14***	21***	9*	42***	49	10		22***	10*	37		
24	18***	16***	34***	109***	50	6		8	10	64***		
25	4	4	4	17								
26	22***	47***	36***	146***								

54年度生の特徴を京大生と比較してみると、

4. (根) を描く人が多い
8. (文字の書き込み) が京大男性同様に多い。
14. (戯画的表現) が少ない。女性の特徴とも読める。
16. (用紙からはみ出し) が、看護学部の学生には多いが本学の学生は少ない。
17. (立体感) の表現が少ない。
19. (斜幹) が非常に少ない。
20. (曲幹) も非常に少ない。
22. (幹の傷) が少ない。
23. (電柱的幹) が少ない。
24. (三次元枝) が少ない。
26. (下向きの枝) が非常に少ない。

樹型に

28. (冠型) が少ない。どちらかという和基本型が多い。

幹端に

34. (鋭閉) が少ない。
 36. (放散) が多い。
 37. (直閉) が少ない。
 38. (ものかげ) が少ない。
 43. (中心が e) が絶対的に多い。
 50. (葉も線描樹冠もかかれていない) が少ない。

Fig. 1~60 のグラフからは次のことがわかる。

1. (実) を描く人が53年以外80%以上である。
 4. (枝) を描く人が75%以上である。
 43. (e を中心にする) が80%以上である。
 9. (線描樹冠) があるのが半数以上である。
 ごく少数の人しか描かない項目には次のようなものがある。
 3. (花), 12. (裸木), 13. (周辺佇立), 14. (戯画的表現), 18. (二本以上), 19. (斜幹), 20. (曲幹), 22. (幹の傷), 23. (電柱的幹), 24. (三次元枝), 25. (一線枝), 26. (たれ下った枝), 30. (ヤシ型樹型), 31. (枝のみ), 32. (その他の樹型), 33. (幹端の開放), 35. (ツキヌケ), 37. (直閉), 40. 41. 42. 44. 45. 46. (中心が e にないもの), 49. (葉も線描樹冠もある), 50. (葉も線描樹冠もない),

以上のことから云える本学々生の特徴としては、「実のなる木」という言葉によって、指示されたことを、素直に受けとり与えられた紙の中にきちんと収める。

空間利用についてみた時、内因性の病状を現わすものがかなり特徴的な利用をするばかりでなく、登校拒否といった適応異常を示す児童などが隅の部分を使って描き、学校における自分の座を失って傍観者の立場、回避の空間へ自分を定位させていることを表現することが多いことが知られている。それにひきかえ本学々生は中心を使用し、逸脱しないで描けるということは安定感のよさ、バランス感覚に優れた健康度の高い集団といえる。

これに反し個性的な成長をしている人は少ないように思える。京大生では全体的に立体感、戯画的表現の多さからみて個性派の多いことを示している。特に女子に関しては、屈折した個性と表現されているが、本学ではその様な特徴は見られず、素直に成長した人々の多さがわかる。

線描樹冠を描く人が半数いる。これは女性に多い特徴で京大生でも同じである。自分自身の未分化の部分さらけ出すのではなく、外界とのかわりをしっかりつけることで自分を守る機制を働かせているのであり、日本の社会の中でまだ女性の解放が充分でないからともいえる。

京大の男性同様、文字の書き込みをする人が比較的多いこと、用紙のはみ出しが少ないことは知的なまとまりはあり、概念的に統合する能力は優れているが、そこには収まらない時の不安感を常に持ち文字という理論的なもので理由づけをしているのである。

看護学部の学生との共通性があるのではとの予測を持ったが、適性面でかなり相違がみられ

た。看護学部学生には用紙のはみ出しが多いことから、常に人間に接することを前提にしている人々の情緒的発想がかなり自由であることがわかる。その他にも Table 3 の * 印が非常に多く、樹型にも幹端にもその他が多いなど自由な発想が予想される。

どちらかというとして理学部の学生に近い傾向を持つことから、思想的に概念として拐え枠内に収めることは優れているが、情緒的にのびのび表現することが出来ず、女性に特徴的な外界との距離をおく機制から、広い視野にたつ柔軟性のある発想を求めることは困難な人々が多い集団であるといえる。

② 時間的变化からみた特徴

①で述べたとおり時間差の変化より、大学間の相違の方が大きかった。判定方法の違いが出る項目についても前述したがそれ以外にかなり学校差が出ている。8年間の経過で殆んど変らない傾向を示すことは、バウムテスト自身の独自性、信憑性の高さといえる。これだけ変化のないデータとして集積されることはテストとしての価値が高いことである。

顕著な変化は少ないが、わずかな変化は受けている。まず9年間に少しずつ変っている傾向の第1は Fig. 60 に示された空間利用 H 計である。9分割した空間の利用が、53年の平均としては7個位を使用して描く人が殆んどであるが、61年の平均は8.4個、いいかえると用紙の81%使用だったものが93%を使用するようになったことである。使用する位置は Fig. 51~59 に a から i までの区分で示したが、片寄りなくどの項に対しても上昇している。e については殆んど 100% 使用の為上昇範囲がない。

与えられたものを最大限に利用する、効率のよい活動能力が培われているのだろうか。高度経済成長期といわれる昭和35年から45年にかけて出生した18~19歳の学生の描いたバウムである。この時代背景からの影響は当然受けているものと思われる。テレビが家庭に入ってきた歴史とも関連づけられるであろうし、共通一次試験が始まったのが昭和54年であり、丁度このテスト年代に入る人々である。共通一次試験は、マークシート方式という試験慣れを広めるのに効果がある方法をとった。薬学に進学してくる学生達は殆んどこの受験体制の中で育っている。このことはテストと云われただけで、記憶力のテストでなくても素直に要求されたものに答える、枠にはめる能力は増強されているのである。本来のテストは身についた知識の量をはかるものだったが、現代はテストそれ自体が目標になっている感がある。テレビの次に家庭に入りこんでいるファミリーコンピュータは映像文化の産物として尚それを増幅させている。ゲームの答は瞬時に反応した方が勝利に結びつくことが多い。

情緒の発達を伴った知識の裏づけではないので、バウムテストのような心の発達まで投影するテストに向った場合、如実に現われてきている。

部分的変化として

1 (実) がわずかに増加している

6 (地平線) が増加

21 (幹の模様) も増加傾向

38 (ものかげ) の増加、これらがみられたが、増加項目が表層部分からの表現としか見えない。三次元の枝、立体感、戯画的表現などではないのである。幹の模様であっても、描くというより気軽にさらっと流した線などでの表現が多い。イラスト的である。

増加傾向は内面の発達を示しているのではなく、テストという言葉にだけ反応した結果である。

まとめ：

新入生に毎年バウムテストを実施している。昭和53～61年までの9学年分、約2000枚の樹木画が集まった。

京都大学で昭和51年に同じテストの集計を行っているの、その整理方法に準拠して整理した。

本大学々生の樹木画からみた特徴は、指示されたことには素直に従い、逸脱したことはしない、知的にものごとを処理する能力には優れているが、情緒的のびやかさで表現することは苦手である。

時間的経過を追って整理したが顕著な変化はみられなかった。このことはバウムテストの信憑性の高いことである。その中でわずかな変化が見られたことは、空間利用が年々増加してきていることである。これはテスト慣れした学生の増加、映像文化の影響から利用範囲を拡大させているのであるが、その内容を見ると情緒的発達とは無関係である。

引用文献

- 1) 佐藤正保他「大学生に集団的に実施したバウムテストの量的分析の試み」(第1報)臨床精神医学7：207～219.

参考文献

1. C. コッホ/林他訳, バウム・テスト—樹木画による人格診断法 (1970) 日本文化科学社
2. 一谷・林他編, バウムテストの基礎的研究 (1985) 風間書房
3. 林・一谷編, バウムテストの臨床的研究 (1973) 日本文化科学社
4. R. コッホ, 林他編, バウムテスト事例解釈法, (1980) 日本文化科学社